

現在、約70の海外稲門会が世界各地で活動しています。
海外に滞在する際は、現地の稲門会を検索して参加してみましょう。
※一部、活動休止中の稲門会もありますことを、ご了承ください。

会長メッセージ

休眠状態のパリ稲門会が、再生に向けて動き出したのが1988年。以来32年。一番大きく変わってきたことは何かと問われれば、会員に占める女性の割合がフランス語でいう「パリテ」に近づいていること。事務局長、会計、ブログ担当を含めた会の幹部も女性が占め、パリ稲門会は女性の活力で歯車が回っていると、言っても過言ではありません。フランスでは、閣僚に占める男女の数を同数にすることを「パリテ」と言います。2020年7月に発足したカステックス内閣の閣僚は、男性8人に女性8人と男

女が同数。閣外相にいたっては女性9人男性6人で女性が上回ります。史上最年少の39歳でフランス大統領となったマクロンは「En Marche! (前進)」という中道の政党を結成し、「右でも左でも政党でもない」と訴え、女性議員の参加率と地位を一気に高めました。日本における女性の社会進出は著しいのですが、現実フランスのそれとは程遠いものです。パリ稲門会では女性が輝いて諸活動を行っていることを誇りますし、これからもそれは続いていくでしょう。
片川喜代治(1969年商学)

会員からのメッセージ

稲門会に参加してはやウン十年。会員間親睦の「飲もう会」から、笑顔がほころぶようにと改名した「ほころびの会」の隊長(幹事)を拝命したのが2003年。パリ南郊外のソー公園内の桜園でのお花見、セーヌ河畔を海岸に見立てたパリ・ブーワジューでの夏のピクニック、その他英国パブやレストランで集まります。お花見とピクニックは、他大学やフランスのグランゼコールにも輪が広がり、在仏大学同窓会の合同イベントになっています。

深沢 至(1982年文学)

2年前にパリ日本文化会館に赴任して参りました。パリ稲門会の飲み会では、多才で多彩な先輩たちや元気な後輩たちとお話するうちに、いつも元気ももらっています。たまにしか出席できない(私のような!)会員でも気兼ねなく参加できる敷居の低さも魅力です。パリ稲門会の懐の深さと居心地の良さをいつも感じています(幹事の皆さまに感謝です!)。パリにお引越されることがありましたら、ぜひパ



2019年11月
ボジョレー・
ヌーボー解禁
のソワレ

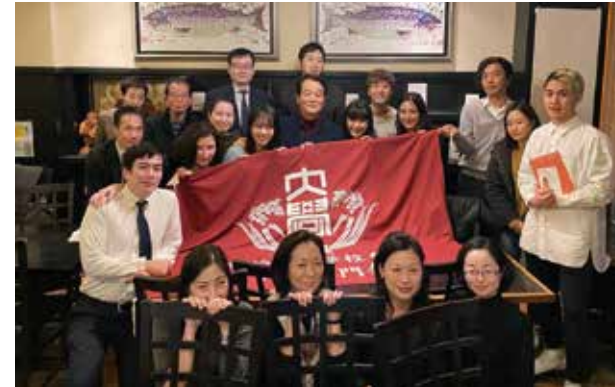
リ稲門会を検索してみてください。
諸橋 忍(1999年法学、2001年アジア研)

駐在生活も4年が過ぎ、駐在では古参ですが、パリ稲門会ではまだまだ「新人」です(笑)。学生時代は空手部で卒業後もコーチとして大学に通い、現総長の田中愛治ゼミに所属するなど、早稲田とはご縁が深いです。当会の定期飲み会「ほころびの会」を担当しています。片川会長から「稲の花のほころび、そしてそれを見た人々の笑顔のほころびから人々の幸せを願って」命名されたといひ、その名に恥じぬ会にと企画実行しています。コロナ禍で開催を見合わせていますが、こんなときこそ「ほころびを」と再開を切に願っています。

鳥井大地(2001年政経)

バラエティーに富んだ会員が当会の魅力です。駐在の方、移住されている方、留学生の方など異なる背景を持つ会員が老若男女問わず和気あいあいと集う会で、そこに早稲田の精神を感じます。おとし開催したボジョレー・ヌーボーの会では、偶然パリにいらっしゃった政治経済学部の先生をゲストにお迎えして、大いに盛り上がりました。パリ稲門会は早稲田から遠く離れたパリでも大学に在籍していたときのような気持ちになれる場所なのです。

伊藤 円(2004年教育)



2020年パリ稲門会新年会

パリ稲門会について

発足は1988年、パリ稲門会の在仏会員数は100人ほどですが、パリ稲門会東京支部会員を含め、帰国後も希望して当会に在籍されている方が多いのが特徴です。コロナ禍で2020年は1月の新年会しか開催できませんでしたが、例年はお花見会、パリ・ブーワジューでのピクニック、定期飲み会「ほころびの会」、美術館ガイド付き鑑賞会、ボジョレー・ヌーボーの会などを開催しています。留学生の参加も活発で、年齢や立場の違いを超えてフランクなコミュニケーションができる貴重な集まりです。
アルブイ共未(1984年文学)

パリの魅力

パリほどグローバル(Think Globally, Act Locally)という言葉が似合う都市はないのではないのでしょうか。パリには学生を中心に国内外から多様な人材が集まり、カフェやバーの至る所でグローバルな問題を議論する風景が見られます。フランス語圏の存在や哲学・文化・芸術の中心としての自負がそのような態度を支えているように映ります。他方、パリはコミュニティとルーティンを大切に保守的な側面も持ちます。毎週決まったパン屋やマルシェ(市場)で食材を購入し、週末は地元のカフェや公園で過ごします。パカンスも毎年決まった国内の避暑地で過ごす人がかなり多いようです。マクドナルドやスターバックスといったチェーン店は世界の大都市に比べて驚くほど少ないのです。このグローバル構造がもたらす帰結として、パリっ子の議論はEvidence-basedでもExperience-basedでもなく、Belief-basedとなるのが少なくありません。

そんなパリも転換期を迎えています。コロナ禍で状況が一変したとはいえ、年々増加する観光客と移民により、加速する地価高騰や治安悪化が快適な都市機能の維持を困難にしているという見方が強まっています。特に、移民が集ま

る郊外におけるLes mineurs isolés(若者ニート)問題はポピュリスト勢力の格好のターゲットになっています。パリを訪れた際には美術館見学の合間にパリの将来についても誰かと議論してみるのはいかがでしょうか。

野本和宏(2010年政経)

(上)エッフェル塔を望むパリ市街

(下)セーヌ川の中洲、シテ島のカフェ

